も知ってほしいというのが、この授業の目標であった。欲を言えば、工業高校の生徒にも、日本と外国、特に開発途上国との様々な分野における交流や国際政治の流れにも興味を持ってほしかったのである。

英語読解の面では、教材をＢＢＣのウェブサイトの南アジア版から多くを借用し、ＡＬＴに書き換えをお願いしたが、それでも語彙面で多少無理があった。また、基礎知識が不足しているために、読解のためのスキーマ(枠組み)が立てられず、読解作業の折には暗中模索の感があった。導入部として日本語での情報を与えたが、さらに多角的な角度から基礎知識を与える必要があると思われる。

フォトランゲージでは英語を書くことを要求したが、平素は英語を「書く」という作業を課していないため、学力的には非常に厳しいものがあった。口頭発表はしなかったが、生徒は和英辞典片手に果敢に英作文に挑戦していたので、日常的に「自由作文」に取り組ませることも可能だと思った。

まとめの作文、特に「日本とスリランカとの交流について」書かせてみると、前述したように期待以上の考え方を書いてくれた。なかには「この授業を受けなかったら・・・」と、この授業を受けたから視野が広がったという意味の感想を書いている生徒がいて、してやったりの感があった。また、経済協力についての基礎知識を披露してくれた生徒もおり、その多様な個性に感心した。

写真を見せるためにＬＬ教室を使用したが、使用できるのは週１回だったので、初め写真を見せたとき時間が足らず、その続きを１週間後に見せることができた。そういう事情で、英語の読解の時間と入れ替えざるを得なかったり、授業内容の重複があったりした。

授業方法については改善すべきところはいくつかあると思う。フォトランゲージの授業では、個人で気づいたこと、考えたことを初め日本語で、後に英語で書かせた。グループで一つの写真について話し合い、意見を出し合った方が、より発展的な意見が出たかもしれない。また、意見の口頭発表まで挑戦させたかったが、時間の関係で今回は書かせるだけに止めた。今回の授業でできなかった種類の活動については、平素の授業の中で行うべきであるとも考えられる。これをきっかけとして、日常のリーディング授業の再計画をする必要を感じた。

本校では総合学習では進路学習を行っており、国際理解の授業が入る余地はなかったが、私一人が担当する英語の授業があったので可能となったわけである。私自身の開発教育、国際理解教育の経験はあまりなかったが、このような機会をいただき、開発教育、国際理解教育の手法を取り入れた英語授業実践に挑戦することができた。あれこれ考えるよりもまず行うことが大切だと思った。というのはこの授業のおかげで、自分の予想以上に生徒の個性、能力の多様性を再確認できたからである。今回の試みに終わることなく、今後も機会あるごとに、開発教育・国際理解教育の授業実践を続けていきたいと考える。

５．所感

授業で伝えたスリランカのイメージは、自分が実際に見てきたもの以上となることはあり得ない。英語の説明を付して生徒に見せた写真は、私が体験した村やコロンボでの生活の様子をどれだけ伝えることができたのか。

フォトランゲージは生徒から写真以上の思いや考えを引き出すことができたのか。私が

知ることができるのは、生徒が書いた作文と思いを綴った文章からだけである。

コロンボは事実上の首都であり、交通や経済は他の地域と比べると格段の差がある。町は日本製の自動車に溢れ、スリーウィーラーがその間を駆け抜ける。開発途上国といえども首都級の都市は何でも豊かである。日本人も快適に生活できる。

一方、村落では人々の生活は質素になる。トイレしかり、シャワーしかりだ。トイレは、用を足した後は水で洗浄するので紙は備えていない。シャワーは湯はなく、水だけだ。便利な生活に慣れきった我々はこんな生活には不便を感じることが多い。しかし、それを考えても、村での生活は心地よかった。空気は澄み、椰子の木は高くそびえ立ち、鳥の鳴き声の中で人は語らう。人間の生活の場の隣で、原色の羽の鳥やリスや牛が生きている。なんといっても、人との触れ合いが我々の心を和ませる。すれ違い合うとき、交わす言葉とともに実に素朴な微笑みを残してくれる。そこには、日本人がもう何十年も前に失ったものがある。

スリランカの村人が残してくれた心の温もりと純朴な微笑みを授業で伝えることができただろうか。コロンボの交通渋滞の中でも力強く生き抜くスリーウィーラーの運転手たち、経済発展から取り残され、トイレさえ最近になってやっと手に入れることができたという、スラム街の人々の屈託のない笑顔。生徒は気づいてくれただろうか。「コンピュータが一台もない」と訴えかけるような目で我々に切々と話しかける小学校の女性教師。それでも、英語をぎっしりと書き込んだ学習ノートを無邪気に我々に見せる子供たち。日本の高校生は自分から楽しんで勉強しているだろうか。

ところで忘れてならないのは、私たちが受け入れてもらった(？)ことには訳があるということだ。村で我々が受け入れられたのは、NGO が村に対して人的な支援を行い、それが村人の利益にかなっているからである。日本人がスリランカで好まれるのは、日本がスリランカに対して人的、経済的支援を行ってきているからである。そのことも高校生は知っておくべきである。

「英語授業を通して」の国際理解・開発教育であるから、どうしても英語の理解に重点が置かれる。しかし、生徒がさきほど述べたような事柄を考え、知っておくことも同様に重要である。日本と開発途上国の関係や地球規模の諸課題とその解決について自ら考え、協力して改善を実現していくという主体的な参加に向けた意識を養う観点が必要となる。そのような観点を含めてこれからも授業を考えていきたい。